

## 5 インターネットと非行行動

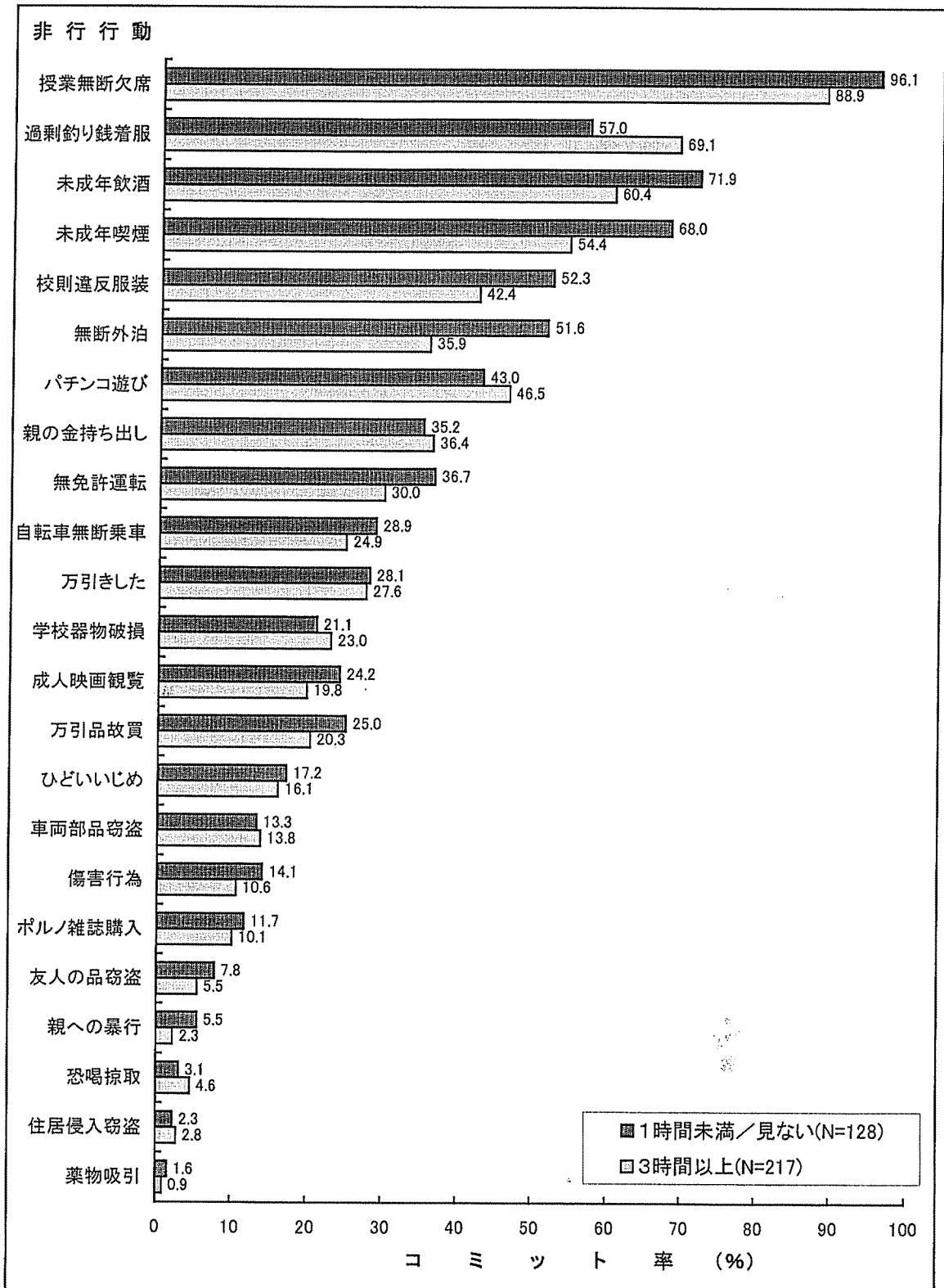
### (1) メディア行動と非行行動

#### ① テレビ視聴と非行行動

今回調査したテレビ視聴行動のうち、「視聴時間の長短」、「日常行動へのテレビ浸透度」、「暴力シーンに対する反応」の3つの項目を選んで、非行的行動との関連を検討してみた。

テレビを長時間視ている習慣を持つ者は、その内容から影響を受ける可能性が高く、非行や犯罪にコミットする傾向も強くなるのではないかという危惧が、しばしば表明される。しかし、今回の調査結果では、むしろ反対に、一日平均「1時間未満」および「テレビは見ない」という低視聴者の方が、多くの非行行動項目において、コミット率が高かった。長時間視聴者の方がコミット率の高い項目はごくわずかにしか過ぎない。

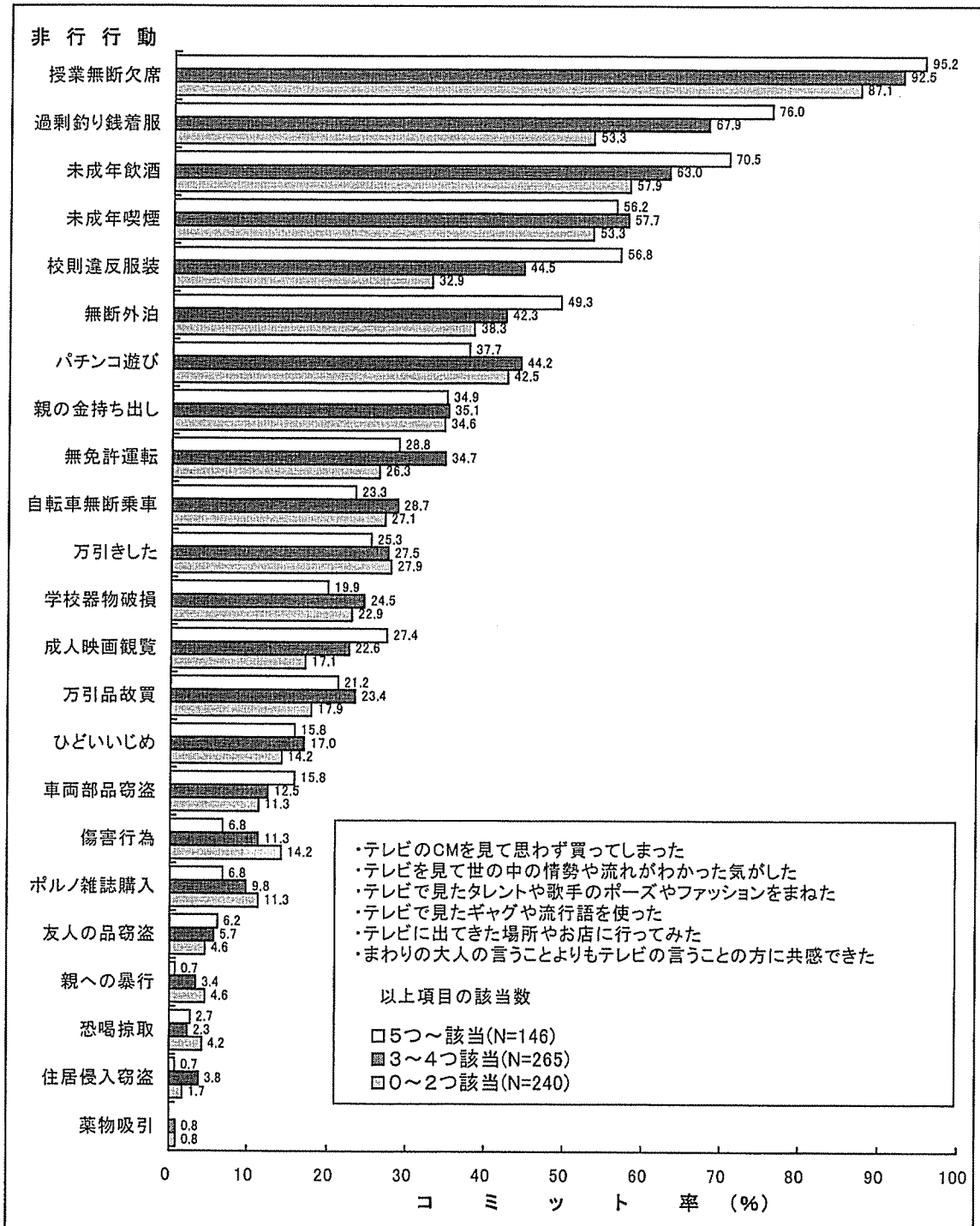
(図表 47) テレビ視聴時間別非行行動



もちろん、この結果だけからテレビは青少年の非行犯罪とは無関係と結論づけるわけにはいかない。テレビが日常の生活行動の中にどれだけ浸透しているかを測った「テレビ浸透度スケール」と非行行動へのコミット率をクロスしてみると、

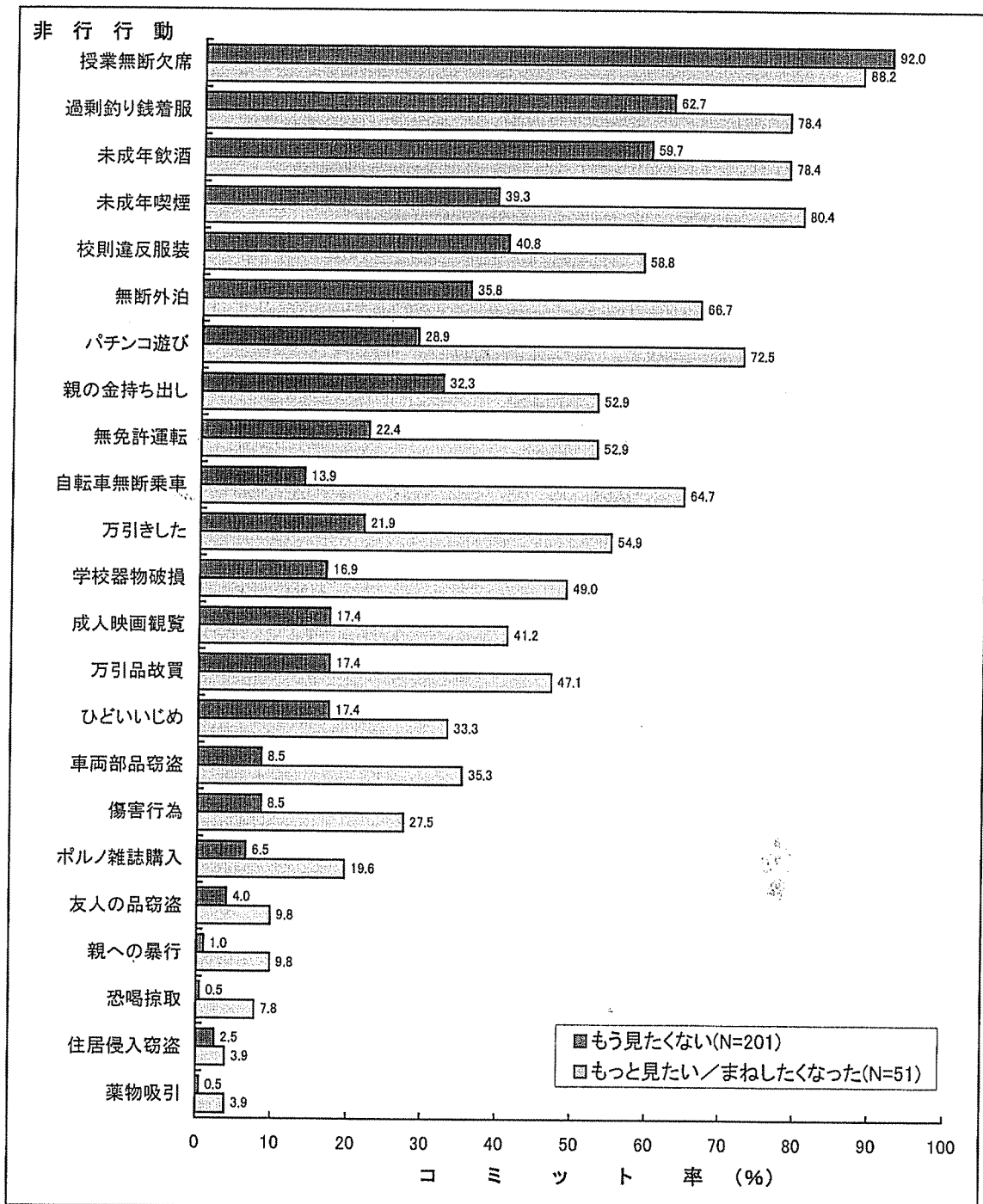
浸透度が大きくなるにしたがってコミット率がリアに高くなっている項目が目立ち、反対の傾向を示す項目はごく少ない。すなわち、社会情勢の認識をテレビに依存し、テレビ番組やCMに即時に反応しやすい傾向を持った者の方が、非行的行動にコミットする比率が高いということである。

(図表 48) テレビ浸透度別非行行動



更に、テレビの「暴力シーン」に特化してその反応をたずねた質問に対する回答と、非行行動へのコミット率をクロスしてみると、ほとんど全ての項目にわたって、暴力シーンを「もっと見たいと思った・まねをしたくなった」と答えた者の方が、「もう見たくないと思った」者よりも、コミット率が高いのである。

(図表 49) 暴力シーンに対する反応別非行行動



しかしこの結果からただちに、〈テレビの暴力シーン〉→〈暴力に対する好奇的反応〉→〈非行・犯罪〉という連鎖を想定して、テレビを糾弾することは早計に過ぎよう。暴力に対する好奇的な反応と非行・犯罪行動の両者を誘発する第3の要因が、存在するかも知れないからである。例えば、成長過程における心理的な抑圧体験、家庭や友人グループの中に存在する暴力容認的な雰囲気、拘束的な社会規範に対する反発感情などのいずれかが、テレビの暴力シーンという刺激に対しては好奇的あるいは共感的な反応を触発し、また別の状況的刺激下において非行や犯罪を動機づける、といった可能性が考えられるからである。この点に関しては更に細かい調査が必要である。